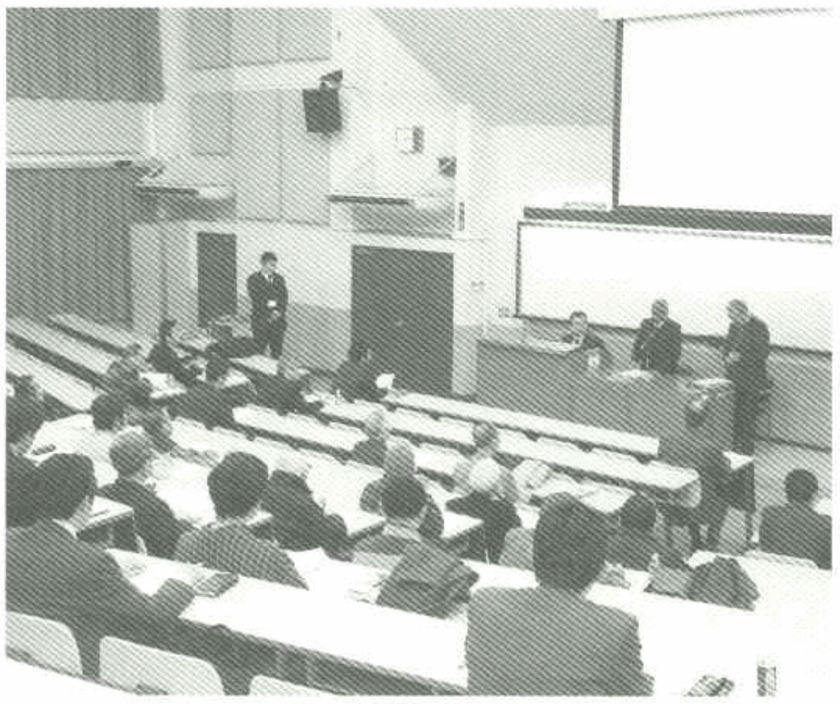
拓殖大学
イスラーム研究センター
The Shariah Research Center
مركز دراسات الشريعة
ニューズレター Vol.4 No.4

第4回 イスラーム・セミナー開催 ～マルディブ共和国に生きるイスラームの教え～

平成19年2月17日（土）午後2時より4時まで、文京キャンパスS館401教室において2006年度イスラーム研究センター主催による「イスラーム・セミナー」が開催された。今回はインド洋に浮かぶ国民の百パーセントがイスラーム教徒の国、マルディブ共和国の最高裁判所長官でありイスラーム最高評議会議長でもあるムハンマド･ラシード氏に講演を依頼して快諾を得て実現したものである。氏と当研究センターとの関わりは、当研究センターのシャリーア専門委員会委員長の武藤英臣客員教授がエジプト留学中に親交を深め、それぞれが帰国後も連絡を取り合っていたことから、いつかチャンスがあれば日本で講演してもらうという約束をしていて、今回ようやく実現したといういきさつがあった。

講演はいつものようにクルアーンの朗誦から始まり、森伸生イスラーム研究センター長の挨拶に次いでムハンマド･ラシード最高裁長官がアラビア語で講演し、それを武藤シャリーア専門委員会委員長が逐次通訳すると言う形で進められた。講演の趣旨はマルディブと言うイスラーム教徒が百パーセントの国におけるイスラームの実態を報告してもらうことにあったが、その前にマルディブと言う日本人にはまだまだ馴染みの薄い国についての説明から始めなければならなかった。そのため講演は前半に国の説明をし、後半にイスラームについて話すという二部構成にして、その中間にマルディブの写真を見せると言うマルディブの全体を知らせたい長官の意図に沿ったものとなった。以下にその要約をお伝えしたい。


講演風景

第1部 マルディブ共和国について

まず初めに国名のマルディブの由来について、長官は19世紀後半に英国保護領になった際に「マルディブ諸島」と呼ばれたと語り、古くはジーバトル・マハリ（魚の国）という名で知られていたそうだ。現在はマルディブ語でディブヒラージェ（マルディブ人の国）と言っているとの説明があった。

マルディブの位置と国土

マルディブはスリランカの南西、インド洋上に位置し、スリランカから750キロ、インド大陸の南端からもほぼ同じ距離にある。南北に広がる珊瑚礁の上にある小さな1，200の島々から成り立ち、その分布は、最北端の島から最南端にある島までは800キロ近くある。東西には80キロから150キロほどの幅で広がり、領海も含めた国土の広さは115，300平方キロだ。これら島で住民がいるのは200の島だけだ。

国民

最近の国勢調査では、総人口は300，000人だった。国民の祖先は、南インド、スリランカ、アラビア半島南部、マラヤ半島、アフリカ大陸東岸のザンジバルなどから、渡来し、お互いに同化しあい現在のマルディブ人となっている。

気候

マルディブの気候は、赤道直下の海洋性気候で、年間を通じ摂氏23度から33度の間にある。一年のうち1月、2月、3月に雨が少なく、他の9ヶ月は非常に多量の雨が降る。

経済

マルディブの主要な産業は海産物加工と観光だ。農業は耕作地が少ないため自国消費を充足出来ないが、それでもバナナ、ココナツ、マンゴ、パイナップルなどの果物やタロ芋、薩摩芋などの作物は植えられ国内消費の一助にされている。

観光島

もう一つの重要な収入源である観光については、観光客専用に観光島を設定している。その数は88島あり、世界中からの観光客がこれらの島々で、休日やハネムーンを過ごせるように準備されている。政府は豊な自然を守るために最善を尽くして観光客の受け入れに努力している。

政体

マルディブはイスラームが入る前は、世襲のスルタンが国を治めていた。この体制はイスラームが入ってからも長く続いた。しかし1953年1月1日英国の保護の下スルタン制から共和制に変ったが、この共和制は長く続かず、僅か7ヶ月23日間のみで、またスルタン制に戻ってしまった。そして、1965年7月26日に英国の保護領から完全に独立した後、1968年に行われた国民投票で王制から再度共和制へ変更された。現在のマームーン大統領は1978年から6期任期を勤めている。

教育制度

マルディブの教育制度は小学校が7年、中学が3年、高等学校が2年で、授業は英語で行われている。また今年度中に国立総合大学が開設される予定である。一方、イスラーム学習については専門学校があり、イスラーム圏にあるイスラーム大学と同様な科目とレベルをアラビア語で教えている。

就学率

マルディブ国民の識字率は98．94%にのぼる。現在就学児童数(男女合計)は102，073名です。総人口の34%が就学児童である。

マルディブとイスラーム

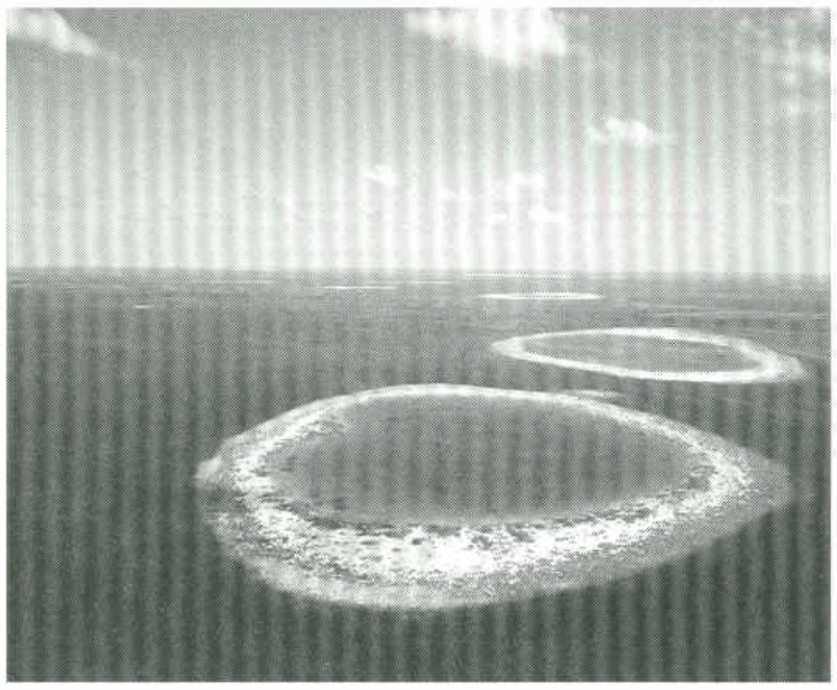
イスラームがマルディブに入ったのは今から879年前（西暦12世紀中頃)、モロッコ人のアル=ハーフィズ　アブ・ル=バラカート　ユースフ・アル=バルバリー師の手による。

師の名前の「アル=ハーフィズ」は全クルアーン暗記者という意味で、「アブ・ル=バラカート」は祝福の父という意味の愛称で、「ユースフ」が自分の名前で、最後の「アル=バルバリィー」はモロッコのベルベル族出身という意味だ。

イスラームが受け入れられたきっかけは、師が首都マレーのとある一人の老女宅に身を寄せていたとき、ある日の夕方、寄宿している家の老女と周囲の女性達が嘆き悲しんでいる場に遭遇した。そこでその理由を尋ねると、老女は、この町の慣習として、毎月一回籤引で選ばれた処女を決められた夜、町の西海岸端にある修験小屋に連れて行き「ランマール」という鬼の生贄に差出さなければならず、今回、自分の一人娘が不運にも籤引で選ばれてしまったからだった。師は老女を慰め、娘に代わってか彼女の着物を着てその修験小屋へ行くことにした。小屋の中で師は一人で座り、クルアーンを朗誦し始めた。夜も更けた頃、海の彼方から煌々と光り輝くランプをたくさん燈した一艘の船が近づいて来るのが見えた。船は修験小屋の数メートル先まで来て、中で師がクルアーンを朗誦する声を聞いた途端、その声から急ぎ逃れようと、浅瀬で反転したが、海底の岩に座礁し、逆巻く怒涛に巻き込まれ粉々になって沈んでしまった。朝になって人々が様子を見に来ると、彼等に分からない何かを朗誦する師をそこに見出し、人々は驚き無事を喜んだ。そこで人々は師を連れてスルタンのところへ急いで行き事の次第を話した。スルタンは驚き、師の宗教に興味を示して3ヶ月同じことをして無事であったら入信すると約束した。しかしスルタンのイスラームに対する興味は日ごとに増し、一月もしない内に師を城に呼んで、教えについて尋ねた。師がイスラームとその特性、その基本、アッラーの書クルアーンの功徳について説明を終えた時、スルタン自身、彼の家族、家来達とともども、イスラームへ入信した。その後、スルタンは1153年6月自分の領民達へイスラームの教えを受入れるよう命じた。この時からこの国の住民達は、イスラームを信奉するようになった。

第2部　イスラームとその特性

長官は、このテーマを選んだ理由としてまずイスラームがあらゆる人間に本質的に備わっている天性の教えであると言うことを挙げ、次いでそれが全ての人間に対する唯一の創造主アッラーからの預言者を通しての導きであることを述べた。そしてイスラームが物質と精神のバランスを取った中庸の教えであり、自己の生き方を傲慢になることも厭世的になることもなく現世においても来世においても幸福を実現するための指針を与える教えであることを強調した。


サンゴ礁に囲まれたマルディブ諸島

イスラームの特性

長官はイスラームの特性としていくつもの点を指摘し、それに関わるクルアーンとハディース（預言者言行録）を提示された。その中からいくつかを以下に抜粋する。

1－イスラームはアッラーが受入れる唯一の教え。

【本当にアッラーの御許の教えは、イスラーム（主の意志に服従、帰依すること）である。】（クルアーン3章19節）

2－イスラームの教えは一つ。

教えが一つであることはアッラーが預言者ムハンマドに対し、啓典の民であるユダヤ教徒やキリスト教徒に唯一真正な教えに従うことを呼び掛けていることから分かる。

【言ってやるがいい。「啓典の民よ、わたしたちとあなたがたとの間の共通のことば（の下）に来なさい。わたしたちはアッラーにだけ仕え、何ものをもかれに列しない。またわたしたちはアッラーを差し置いて、外のものを主として崇めない。」それでもし、かれらが背き去るならば、言ってやるがいい。「わたしたちはムスリムであることを証言する。」】（3章64節）

このように教えが一つであるなら、色々な時代に使徒や預言者たちによって教えられた人々の間で仲違いや紛争が起きないはずだが、残念ながら唯一の教えを受けた人びとは、それぞれが自分たちの都合に合わせて変えてしまった。このような状況を正すため、最後に預言者ムハンマドがそれらの改変を正し、真性な教えに戻すべく唯一絶対神アッラーから遣わされた。そして、人びとの仲違いや争いを収束し、正しい真性な道（イスラーム）に戻るよう警告を伝えている。

3－シャリーア（イスラーム法）は5つの目的を持つ。

イスラーム法学者は、シャリーアが次の5項を護り維持するためにもたらされたことに合意している。それは教えを守ること、人の命を守ること、理性を守ること、人類の係累を守ること、財産を守ることの5つである。

4－イスラームの原則は、容易であること。

【アッラーはあなたがたに易きを求め、困難を求めない。】（2章185節）

【この教えは、あなたがたに苦業を押付けない。】（22章78節）

イスラーム法学者は、規範の軽減とそのカテゴリーを6種類に分けています。

①免責軽減：　金曜礼拝の免責、ハッジ(巡礼)やウムラ（小巡礼）が出来ないという理由での免責など。

②縮小軽減：　旅行中の礼拝の縮小。

③交換（代用）軽減：　ウドゥー（水による清め）の代わりにグスル（沐浴）で代用したり、タヤンムム（水の代わりに土や塵で清めをする）や、礼拝を座ったまま、寝たままあるいはサインだけで行なうこと。フィドヤ（ラマダンの断食が高齢や回復不能の病気で出来ないとき、困窮者に食事を提供することでその義務を免れる）などが認められる。

④先取り軽減：　二つの礼拝を時間の早いほうで一緒に行なう（旅行者の礼拝）、ザカート（喜捨）の先払い拠出（通常一年経過後にザカートは計算されるが、それを前払いする）、断食明けのザカートはラマダン明けの礼拝前までに拠出するが、ラマダン月中なら前もって拠出することが認められる。

⑤遅らせる軽減：　旅行者の礼拝で二つの礼拝を一緒にするとき後の礼拝時間に行なうことや、病人や旅行者はラマダーン月の断食を別なときに(遅らせて)行なうことが許される。

⑥不許可の軽減：　医薬品摂取時における医薬品に含まれる不浄物質の摂取、気絶時気付け薬として必要な場合アルコール摂取、強制時における不信仰発言などイスラームでは認められていないことでも必然的状況では認められる。

最後に

講演の最後に長官は、アッラーが創造した人間は、他の如何なる被造物にもまして、素晴らしく創られ、この世を支配し運営する能力を与えられており、それに正しい道を示すのがイスラームであると締め括った。

講演後の質疑応答では、昨今騒がれている地球温暖化と環境汚染に対してその影響を直接受けやすい環境にあるマルディブはどのような対策を取っているかとの質問に、温暖化による海面上昇の影響についてはマルディブは珊瑚礁の上にあり、その珊瑚礁は日々成長しているのでそれほど心配していないが、日本からの援助で海岸線に防波堤を建設しているとのことだった。また環境汚染については、ゴミの集荷を専門にする島を作って、そこに全てのゴミを集め処理していることと観光客にも島の環境を破壊しないよう協力を求めているそうだ。

またマルディブの男性と結婚している日本人女性から最近観光客の影響で風紀が乱れ、飲酒やドラッグを用いる若者も見受けられるが対策はしているのかと言う質問には、イスラーム最高評議会の議長でもある立場から、人々に正しいイスラームの知識の普及と学習を諸機関を通じて行っていると答えていた。

マルディブの紹介を含めてイスラームまで話すには時間が足りないところもあったが、参加者には新たな発見も多い講演だった。

ハディース入門（6）–ハディースの分類

マラヤ大学イスラーム学アカデミー博士課程　大木博文

はじめに

前回までに検討してきたサヒーフ、ハサン、ダイーフというハディースの3分割を簡単に言えば、ハディースは信憑性に基づいて、マクブール（受け入れられるもの）とマルドゥードゥ（拒否されるもの）に二分され、前者に該当するものがサヒーフとハサン、後者に該当するものがダイーフである。この3分割以外にもハディースを分類する方法は多々ある。そのうちの主なものを、以下にいくつか取り上げることにする。

伝承者の多寡に基づく分類：伝達に関わった伝承者の世代別の数に注目した場合、ハディースはムタワーティルとアーハードの二種類に分類される。この分類は伝承者の信憑性を問題としているものではないため、ムタワーティルだから受け入れられるとか、アーハードだから受け入れられないという即断はできない。

ムタワーティル：「後続」を意味し、偽作や虚偽の伝達が不可能になるほどに多くの者によって次々と間断なく伝えられたハディースを指す。ハディースがムタワーティルとなるためには、次の4つの条件を満たしている必要がある。

（1）多くの者がそのハディースの伝達に関与していること。最低10人の者がそのハディースの伝達に際して同時に関わっていることとの見解もあるが、実際には何人以上いればムタワーティルと認められるというものではない。

（2）　多くの者が伝承者の各世代に同じ数ずつ存在していなければならない。つまり10人の者が預言者ムハンマドの言行を直接見聞した場合、その各々が10人の者に伝達し、更にそれを聞いた者がそれぞれ次の10人の者に伝達し・・・という伝達行為を10数世代にわたって繰り返されていることが確認されなければならない。

（3）　ハディースを編纂した者に至るまでの伝承経路全体にわたる上記の伝承連鎖に虚偽の申し合わせができないことの確証があること。多数の者が伝達に関わっていたとしても、全員が同じ一族に属していたり同じ町内に住んでいたとなると、代々にわたって虚偽の申し合わせがあったとの疑義も捨てきれない。こうした疑義を払拭するためには、そのハディースの伝達に関わった者の出自、出身地、居住地、所属学派、交友関係等が多様化している必要がある。そうした多様化が認められない場合、ムタワーティルであるか否かは、各伝承者の信頼性によって判断されることになる。

（4）　伝達の事実は五感に基づいていなければならない。つまり伝達が「私は見た。」、「私は聞いた。」、「某が『私は見た』と言っているのを、私は聞いた。」、「彼が私に言った。」、「私が預言者に直接触れた時の感触は、」という表現を伴っている必要がある。一方で「当時の事情は斯々云々であった」というような知識に基づく伝達は、たとえ多くの者が伝達に関わっていたとしてもムタワーティルと認められることはない。

ムタワーティルと認められたハディースは、すべて受け入れられるものであり、法的な論拠としても有効である。

またムタワーティルは、「表現のムタワーティル」と「意味のムタワーティル」に分けられる。「私について意図的に嘘を捏造する者は、業火の中の永住することになろう」という預言者ムハンマドが語った有名なハディースは「表現のムタワーティル」の一例であり、70名を越えるサハーバが全く同じ表現で伝えている。一方で多数の者が伝えているためムタワーティルとみなされるハディースで、表現は異なるが意味するところが一致するというものは「意味のムタワーティル」と呼ばれる。一例として礼拝後の祈り（ドゥアー）の際の挙手についてのハディースは100名近くのサハーバによって伝えられているが、その表現は様々であり「意味のムタワーティル」とみなされている。

アーハード：基数詞「一」の複数形で、ムタワーティルの条件を満たさないすべてのハディースを指す。数から言えば、ハディースの大半はアーハードである。アーハードはさらに細かくその伝承者の数に注目して、次の三つの範疇に分類される。

1. **マシュフール**：字義的には「公示されたもの」を意味し、伝承経路のいずれの段階においても3人以上の伝承者が伝達に関わっているが、ムタワーティルの条件を満たすには至っていないハディースを指す。類似語の「ムスタフィード」は字義的には「流出するもの」の意で、マシュフールと同義に用いられる場合もあれば「すべての伝承経路で、最初と最後の部分に示された伝承者が一致すること」という条件をいずれかに付して区別する場合もある。専門用語としてのマシュフールとは別に「よく知られた」、「例としてよく引用される」ハディースという意味で用いられることもある。例えば次のようなものがある。

（1）ハディース学者の間でのマシュフール：「アッラーの御使いは一ヶ月間の参篭を行い、立礼の後で魂の清めを念じて祈りを捧げた。」

（2）ハディース学者をはじめとする学識者の間でのマシュフール：「ムスリムとは舌と手を用いてムスリムを安全にする者のことである。」

（3）イスラーム法解釈学者の間でのマシュフール：「アッラーにとって合法とされたものの中で最も忌み嫌われるものは離婚である。」

（4）イスラーム法源学者の間でのマシュフール：「私の民からは、過ちと忘却と嫌悪すべきものが取り除かれるであろう。」

（5）アラビア語文法学者の間でのマシュフール：「最善の僕はスハイブである。彼がアッラーを恐れないとしても、アッラーは彼を罰することはないであろう。」この中の「最善の」という意味のアラビア語「ニァマ」は特殊活用をする動詞であり、それに続く文章は条件節となっているため、語形論や統辞論の例文としてこのハディースはよく引用される。

（6）庶民の間でのマシュフール：「遅延は悪魔より齎される。」

2. **アズィーズ**：字義的には「希少な」または「強い」を意味し、伝承経路のある段階において2人の伝承者のみが伝達に関わっているハディースを指す。有名なアズィーズにアルブハーリー所収の「汝らのうちの誰でも、自分の親や子そして他のすべての人々よりわたしを愛するようになるまでは、真の信仰には達していない。」がある。このハディースを預言者ムハンマドから直接聞いたサハーバとしては、アナス・イブン・マーリクとアブーフライラの二人がよく知られている。しかしアナス・イブン・マーリクからこのハディースを伝え聞いた者は、カターダとアブドルアズィーズ・イブン・スハイブの二人だけで、カターダからこのハディースを伝え聞いた者も、シュァバとサイードという二人の名前が知られているのみである。またアブドルアズィーズからこのハディースを伝え聞いた者も、イスマーイール・イブン・ウライヤとアブドルワーリスの二人以外には見当たらない。

3. **ガリーブ**：字義的には「孤立している」を意味し、伝承経路のある段階において1人の伝承者だけが伝えているハディースを指す。ガリーブには2種類がある。預言者ムハンマドからハディースを直接見聞した者が一人しかいない場合には「絶対的ガリーブ（ガリーブ・ムトゥラク）」という。「行いは意志による。」という有名なハディースを預言者ムハンマドから直接聞いた人物は、ウマル・イブヌル・ハッターブ以外には知られていない。そのためこのハディースはガリーブ・ムトゥラクと判断されている。一方、伝承経路の途中で伝承者が一人だけになってしまう場合には「相対的ガリーブ（ガリーブ・ナサビー）」と呼ばれる。例えば「預言者は頭に棕櫚の冠を被ってマッカに入城された。」というハディースを伝え聞いた人物はマーリク・イブン・アナス以外には知られていないため、このハディースはガリーブ・ナサビーと判断される。「実際には複数の者が伝達しているが、その中で信頼できる伝承者が一人しかいない」、「一人の伝承者から一人の伝承者にしか伝えられていない」、「特定の地域の伝承者にしか伝えられていない」、「特定地域の伝承者から、別の特定地域の伝承者にしか伝えられていない」というハディースもガリーブ・ナサビーとみなされる。

アーハードが受け入れられる条件は次の通りである。（1）アルブ

お問い合わせ先：拓殖大学イスラーム研究センター
〒112-8585　東京都文京区小日向3-4-14
TEL：03-3947-2419　FAX：03-3947-9416
ホームページURL. http://www.cnc.takushoku-u.ac.jp/

平成19年３月15日発行
発行人　拓殖大学イスラーム研究センター
編集人　イスラーム研究センター主任研究員
　　柏原　良英

拓殖大学　イスラーム研究センター ニューズレター

ハーリーとムスリムの両『サヒーフ集』に収録されていて、両者がそのハディースの権威について認めていること。(2) 暗記に優れた信頼できる学者たちがその伝承経路を構成していて、ガリーブではないもの。マシュフールであれば、伝承者たちの信憑性が高く、破棄されるような欠陥が認められないこと。

伝承経路の遡及性に基づく分類：状況に応じて受け入れられるか否かが決まるハディースには、クドゥスィー、マルフーウ、マゥクーフ、マクトゥーウがある。これらは伝承経路の遡及性のみに基づく分類である。そのために即座にそれがサヒーフであるといった判断を下すことはできない。最初の発言者または伝達者と、そのハディースの信憑性との間には、絶対的な相関関係がないからである。

クドゥスィー：「清浄な」という意味で、「我が僕よ、われはわれ自身に対する不義を禁じ、汝ら同士の間にもそれを禁じた。よって汝らは互いに不義をなしてはならない。」と言うように、預言者ムハンマドがアッラーの御言を直接伝えたハディースを指す。クルアーンとクドゥスィーは共にアッラーの御言を預言者ムハンマドが語ったものであるが、違いは以下の3点である。

(1)　クルアーンは一字一句忠実に啓示を再現したものである。クドゥスィーの字句は預言者によって再現されたものである。

(2)　クルアーンはその一字一句の読誦が崇拝の対象となるが、クドゥスィーはそうならない。

(3)　クルアーンの啓示は全てムタワーティルであるが、クドゥスィーの場合は、ムタワーティルか否かは問題とはされない。アーハードのクドゥスィーも実在する。

マルフーウ：「高められた」という意味で、伝承経路が預言者ムハンマドにまで遡り得るハディースを指す。この場合に伝承経路の連続性は問題にされない。伝承経路の一部に断絶があっても、ハディースの遡源が預言者自身であればマルフーウとみなされる。マルフーウは、預言者ムハンマドの実際に言った言葉を伝える「言葉のマルフーウ（カゥリー）」、彼の実際に行なった行為を伝える「行為のマルフーウ（フィァリー）」、彼が無言のまま容認した事項を伝える「容認のマルフーウ（タクディーリー）」、そして彼の倫理的または身体的な特徴を伝える「描写のマルフーウ（ワスフィー）」の4つに細分される。

マゥクーフ：「止められた」という意味で、伝承経路がサハーバにまで遡り得るハディースを指す。アリー・イブン・アビー・ターリブが伝えた「知っていることを人々に話しなさい。アッラーとその御使いについて嘘をつこうとするのですか。」というハディースのように、マゥクーフは預言者ムハンマドの言行に基づいたサハーバの言行を伝えたものである。マゥクーフ自身には法的な論証性はないが、同一のハディースがダイーフとみなされる伝承経路で伝えられている場合にマゥクーフが知られていれば、そのダイーフの信憑性を高めることができる。また同一のハディースがマルフーウでも伝えられていれば、マゥクーフに法的な論証性を認めることができる。ホラーサーンの法解釈学者たちはマルフーウを「ハバル（情報）」、マゥクーフを「アサル（そくせき、足跡）」と呼び分けているが、ハディース学の慣例としては両者共に「アサル」と呼ぶことになっている。また表現上はマゥクーフであるが内容的にマルフーウとみなされるハディースに、次のようなものがある。

(1)　創造の始まり、終末の徴、最後の審判、特殊な報酬や懲罰など人知を超える内容について、預言者ムハンマド以外の人物から聞いた事実が確認されないもの。

(2)　サハーバの慣行を伝える内容で、その慣行が彼らの判断に基づくものではなく、明らかに預言者ムハンマドの慣行に従ったものであると認められるもの。

(3) サハーバの言行のうち、誰からも批判されずに受け入れられたもの。

(4) サハーバが命令されたり禁止されたりした内容や、預言者の慣行を伝えているもの。

(5) 初期の段階で伝達に関わった者が、「サハーバの某が伝え聞いたものである」との旨を明言しているもの。

(6) サハーバがクルアーンの注釈について伝えたもの。

こうした判断は、サハーバの不可謬性を信じるというムスリムの信仰に基づいている。

マクトゥーウ：「切られた」という意味で、タービイーの言行を伝えたものを指す。タービイーは直接預言者ムハンマドに会っていないのでマクトゥーウに法的論証性を持たせることはできないが、マクトゥーウの中にもサヒーフと認められてアルブハーリーの『サヒーフ集』等に収録されているものがある。

伝承経路の連続性に基づく分類：伝承経路の連続性に注目して分類した場合には、すべてのハディースが以下の三つの範疇のいずれかに属することになる。

ムスナド：字義的には「依拠されたもの」という意味で、アルブハーリーやムスリムのようにハディースを収集・編纂した者から預言者ムハンマドに至るまでの伝承経路が、間断なく遡り得るハディースをいう。アルブハーリーの『サヒーフ集』に収録されたハディースは、原則としてすべてがムスナドである。同書の中で参照のために反復収録されたものの中には伝承経路が部分的に省略されているものもあるが、ムスナドと認められる完全な伝承経路を伴った同一内容のハディースが必ずどこかに収録されている。ムスナドの定義については、他に2つの見解がある。ムスナドと上記マルフーウを同義とする見解と、預言者から直接伝え聞いたサハーバが明らかでないか、両者の接点が確認されないものをムスナドとし、マルフーウと区別する見解であるが、いずれも多数派によって支持されていない。

ムッタスィル、マゥスール：字義的にはいずれも「繋がれたもの」という意味で、遡及先に関係なく伝承経路が連続しているハディースをムッタスィルまたはマゥスールという。ムッタスィルまたはマゥスールはハディースが受け入れられるための必要条件であり、ムッタスィルでないものは原則的に受け入れられないものである。従ってムッタスィルには、マルフーウもあればマゥクーフやマクトゥーウもあることになる。また上記ムスナドと同義に使われることもある。またムッタスィルのうち預言者ムハンマドにまで遡り得るものは「ムッタスィル・マルフーウ」と呼ばれ、サハーバにまで遡り得るものは「ムッタスィル・マゥクーフ」と呼ばれる。

ムンカティウ：ムッタスィルでないもので、伝承経路のある部分に断絶が認められるもの。その断絶が伝承経路のどの部分にあるかは問題とされないが、ハディース学者たちは伝統的に、伝承経路に欠陥があるもののうちダイーフの範疇に含まれるムルサル、ムアッラクまたはムァダルのいずれにも属さないもの、という条件を付けている。